

二、情報出版企業として

⑤ 講演録事業(下)

情報のトップランナーをめざして

第九期(平成五年七月)平成六年六月)まず一冊からスタートした講演録は、第十六期(平成十二年七月)平成十三年六月)発刊予定の十八冊を加えると合計五十一冊となり、NTS書籍の総発行数の半数を占める。売上げ実績も年々上昇し今期は出版部門の総売上目標の約五十%を占めるまでに成長した。しかし、一昨年から新たな試みとして商品開発を進めてきた「学会講演録」が既に四冊を重ね、いずれも好調な推移を見せ事業としての厚みを増しつつある中で今、講演録事業は一つの転機にあるといつてもよいだろう。

講演録事業のみならずNTSの原点が「セミナー」であることは既報の通りであるが、創業期(昭和五十九年一月)同年十二月)全売上の約七十%を占めたセミナー事業もその割合は年々低下し、前期売上に占める割合はわずかに二%に過ぎない。だが、その二%が出版部門の売上の約四十%を占める講演録事業の凡そ半数を占める素材であることを考えれば、欠かせざる二%ということもできる。それは又、出版社としてのアイデンティティ、即ち「情

報」という価値を支える二%であり規模では評価できない部分でもある。今必要とされる情報を明日ではなく今日摘み取る「技」が今日のNTSを支え続けたことを考慮すれば、「セミナー」の存続には必然性があると思われる。だが、事業周期が格段に短かい「セミナー」が、出版という長丁場の組織の実態に必ずしもなじまないことも事実である。加えて、(社)高分子学会との共同事業である「学会講演録」が「セミナー」の存在を脅かす新たな事業の核として成長する気配を見せはじめている。それは、「セミナー」ほど泥臭くもないがそれなりに速報性があり、市場も安定し、事業としても確実性が見込め、何より今の組織の実態になじみやすい特質を備えている。「学会講演録」の経緯については、NTSニュース二〇〇〇年二月号に詳細を述べた。平成八年春にアイデアを温めて以来四年越しの学会との交渉だったが、「講座の内容をより多くの人が共有できる」及び「講座の内容を正式の記録として残すことができる」という同学会事業委員会での主旨説明が受け入れられた結果でもあった。現在、他にいくつかの学会及び研究会の関心を引いている。一部で旺盛な活動を見せる日本の学会事情を念頭に置けば、事業としての「学会講演録」の可能性は非常に大きく規模だけであれば「セミナー」を上回ることも夢ではない。そうした点を踏まえた上で、「セミナー」の存続を組織の問題として再考する時期にあると言え

るだろう。

平成五年にスタートした「講演録事業」は八年目を迎え、今や大型本と並ぶ出版事業の第二の柱に成長し、ますます事業としての勢いを増しつつあるが、今後更に発展を遂げるための戦略の要点を二つ挙げる。第一に価格戦略である。平成五年新規事業としてスタートした時の「建廃」の定価は、三万円以内という講演録事業の基本コンセプトにのっとり二万五千円に設定したが、その後経済事情もあつて年々高額化し、四〜五万円が当たり前の状況が生まれた。この一、二年はテーマによつて価格帯を柔軟に選択する戦略を採用しているが、「学会講演録」という新規商品が誕生した今、このあたりで一度考え方を整理しておく必要があるのではないかと考へる。顧客ニーズを如何に把握するかである。第二に制作期間を如何に理想に近づけるかである。「建廃」は完成までに十ヶ月を要したが、その後、現場の技量向上やそれを支えるハード・ソフトへの積極的投資やアウトソーシング等の効果もあつて、完成までに要する時間は約三ヶ月を視野に入れるところまで来た。だが、「情報」という鮮度が命の「講演録事業」の納期短縮に限界の二文字はないはずである。今日の「情報」を明日ではなく今日伝えるという「セミナー」の精神を尊び、「講演会」終了と同時に「講演録」を配布する理想の実現へ邁進する活動が更にスケールの大きな事業展開を可能にするのである。

掲示板

今日の人事

一月九日入社

営業部
エヌエスハイテック

社内清掃について

次の日程で、業者による社内の掃除を行いますので、貴重品や個人データ等の管理に遺漏のないようお願い致します。また、当日休日出勤の予定がある場合は、必ず総務部に連絡して下さい。

二月二十五日(日)
三月二十五日(日)

編集後記

●新世紀をむかえて何かが変わった……? といえる年にしたい。(福)

●年末年始休暇は長くてとつてもリフレッシュできたわ。夏季休暇もそうだといいのになあ。(の)

●去年暮れに引越しました。21世紀を新天地で迎え、一言「金がない」今年も頑張るゾー。オーツァー(村)

●敵軍を乗り越えれば、大好きな春。ガーデニングに釣りにハイベキュー。アウトドアの楽しみがいっぱい。2月には寒梅も見にいこうかな。(な)

●クローン人間や人間型ロボットが世間を賑わしている。自分人間だが、その理由は何かと問われれば答えに詰まる。人間の定義とは?(い)

NTSニュース二〇〇一年一号(通巻二十七号)
二〇〇一年一月三十一日発行